

特集：OTOTEN 2017

OTOTEN2017・ラックスマンの取り組み

ラックスマン株式会社

日本オーディオ協会理事・音のサロン委員会委員長

小嶋 康

はじめに

本年、会場を東京国際フォーラムに移しての新生「OTOTEN」は、オーディオ業界に新たな顧客を呼び込むことをコンセプトに、30~40歳代の音楽ファンをターゲットに据えた新しいイベントとして生まれ変わりました。

私は OTOTEN 実行委員としても活動していましたが、準備段階からこのコンセプトを知ることができ、テーマの持つ重要性についても深く受け止めていました。なぜならば、ラックスマン自身も、ユーザーの高年齢化や若年ユーザーのスピーカー離れを意識する毎日でありましたし、2025年に100周年を迎えるブランドとしても、新しいユーザーを開拓すべく、趣味の音楽鑑賞の近未来像について、否が応にも想像していかざるを得ない時期と立場だったからです。

ラックスマンが日々実施している試聴イベントは、新製品のハードウェア情報を技術的な観点から紹介したり、その特徴をうまく活かすことのできる良質の音源を再生したり、というスタイルが一般的です。

再生する音楽ジャンルは、およそクラシック4割、ジャズ3割、ボーカル3割、といったところでしょうか。デモンストレーションする側としては、悪い音が鳴ってしまったては困るという事情もあり、アコースティックでシンプルな曲、響きの豊かな曲、低域から高域までの幅広い帯域で鳴る曲などが好ましく、どうしても先に上げたジャンルに偏った選曲となっていました。

ところが近年数多く開催されているヘッドフォン関連イベントでは、アニソンやハードロック、アイドル曲など、ユーザーがふだん好んで聴いている音楽ジャンルを、参加者自らが音源を用意し、試聴を希望する場面が多くみられるようになってきました。

いうまでもなく当たり前のことですが、オーディオ機器は、「音楽を鳴らすためのコンポーネント」であり、「コンポーネントを鳴らすための音楽」をメーカーの論理で強制してはいけません。このままでは、「オーディオってお金持ちがブランデーグラス揺らしながらクラシックやジャズを聴く趣味でしょ」という揶揄が現実化しかねない状況です。

そこでラックスマンは、ヘッドフォンだけでなく、スピーカー再生環境においても音楽志向のオーディオであるべく、これまでの状況を少しでも変化させたいと考え、OTOTENに会場される30~40歳代の音楽ファンに対し、オーディオ本来の「好きな音楽をいい音で聴くためのコンポーネント」からは「お金を出すに値する感動が得られる」という魅力をあらためて提案するため、自社ブースにていくつかのチャレンジをすることにしました。

ブース装飾

同一の会場で秋に開催されている「東京インターナショナルオーディオショウ」への出展では、新製品の紹介が主となっており、壁面に貼り出す展示パネルも、製品の写真やスペックを表記するものでした。しかし今回はターゲット層を考え、オーディオの未体験者に向けた、「アンプとは?」「デジタルとは?」「真空管とは?」といった初心者向けの実用情報をシステム図とともにていねいに紹介することにしました。

実施プログラム

さて、イベントのメインとなるデモンストレーションには、音楽の楽しさをオーディオへの興味と結びつけられるよう、さまざまに嗜好を凝らしたプログラムを用意しました。詳しくは、下記のゲストプログラム表をご覧ください。

●ゲストプログラム

イベント内容	詳細
レコーディングエンジニアが語る高音質とは 「森安裕之氏と検証！ ハイレゾの本当の楽しみ方」	Mr. Children や Alexandros をはじめとする著名なアーティストのサウンドを手掛ける新進気鋭のエンジニア森安裕之氏が、CD制作現場における高音質やハイレゾ音源の本当の楽しみ方を語ります。
あのヒット曲もアナログで！ 「伊東たけし氏と T-SQUARE 最新盤を聴く」	OTOTEN2017 公式大使も務める伊東たけし氏が、大ヒットナンバー「TRUTH」や、自身のオーディオ環境、最新アルバム「REBIRTH」について試聴を交えながらたっぷり紹介します。
<u>(事前登録制イベント)</u> アイドルネッサンス ハイレゾ・ミニライブ	「名曲ルネッサンス」をテーマに活動するアイドルグループ「アイドルネッサンス」の生パフォーマンスと高音質オーディオシステムによるハイレゾ音源再生を融合した「ハイレゾ・ミニライブ」を実施します。
規格化もすすむ話題のワンボードオーディオ 「海上忍氏の ラズパイオーディオ最新情報！」	人気のワンボード・コンピューター「Raspberry Pi」を使用した手軽でカスタマイズ性の高い「ラズパイオーディオ」を、第一人者である海上忍氏みずから最新情報とともに徹底的に試聴解説します。
ハイファイ環境で味わう産業ロック再考証 「岩井喬氏と聴く 80年代ロックサウンド！」	1980年代のチャートを賑わした洋楽ロックの名曲の数々。その中から特に高音質な音源を選びすぎり、ヒットの音楽的要因をオーディオ評論家・岩井喬氏が「産業ロック」という観点から探ります。

●ハイレゾライブの実施

上記の中から、参加者を事前応募とし、完全にクローズドで行った「アイドルネッサンス・ハ

「イレゾ・ミニライブ」について、紹介いたします。

現在、アイドル音楽ファンの作り出す市場規模は、いわゆる趣味の「オタク市場」と言われるジャンルの中でトップを誇ります。

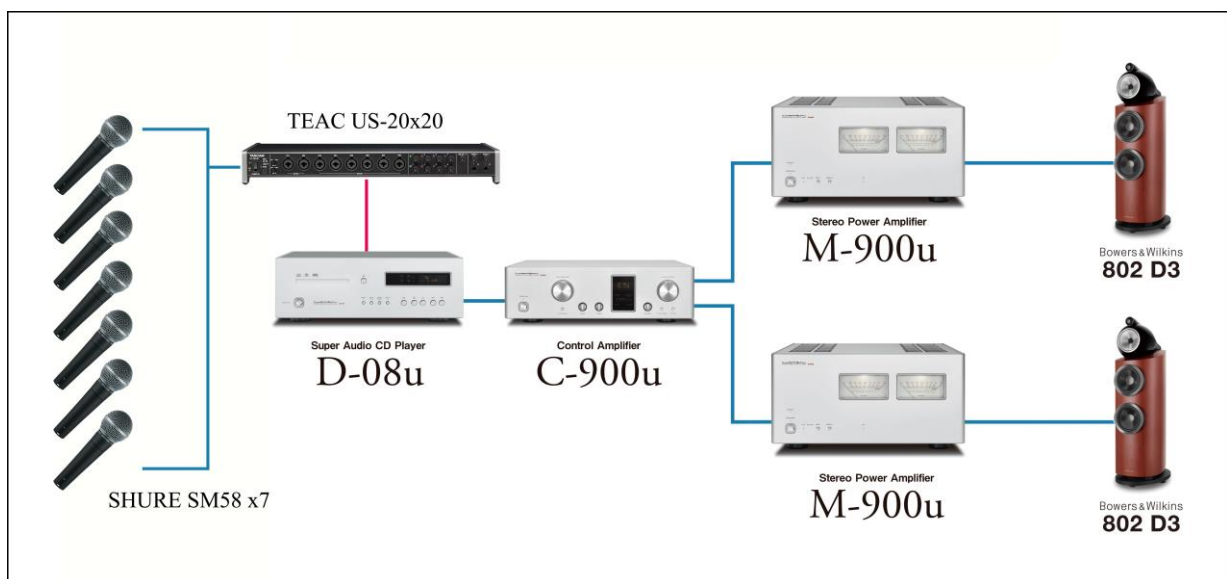
参考記事：<http://www.itmedia.co.jp/business/articles/1612/07/news084.html>

CD 等の売上げが下落傾向である一方、音楽系ライブの市場は拡大を続けており、アイドルに限らずアーティストの売上金は、ほとんどがライブの現場に落とされているといっても過言ではない状況です。

オーディオメーカーとしては、CD をスピーカーシステムで再生してほしいという思いは強いものの、ライブに参加している音楽ファンに対して、いきなり「家で音楽を聴きましょう！」と叫んでも聞き入れてもらえるとは思えません。

そこで今回は、「ライブ」と「家庭内での音楽再生」の間をとって、「オーディオ機器による音源再生をオケにしたライブ」を体験してもらおうと考えました。

システムは以下の通りです。



「アイドルネッサンス ハイレゾ・ミニライブ」システム図

アイドルグループ「アイドルネッサンス」のメンバー7人のボーカルを定番マイク SHURE の SM58 で收音し、マルチチャンネル USB インターフェースである TEAC US-20x20 に接続します。TEAC にはハイレゾ(96kHz/24bit)オケ音源の入った MacBook Pro がつながっており、この中でボーカルとオケが 32bit 空間でデジタルミックスされます。TEAC の出力は同軸デジタル (COAXIAL) で取り出し、ラックスマンの CD/SACD プレーヤー D-08u のデジタル入力端子に接続されます。D-08u の出力以降はアナログ信号となり、C-900u+M-900u にて増幅され、最終的には B&W 802D3 にてスピーカー再生されるというハイエンド・システムです。

当日は、事前にご応募いただいた方々の中から、性別やアイドルネッサンスのファンであるか否か、ラックスマン製品のユーザーであるか否かなどをアンケートし、さまざまなプロフィールの方、およそ45人をバランスよく(少々ファンの方を多めに)選別させていただきました。

そして今回はもうひとつ、「ハイエンドオーディオで再生したハイレゾ音源ライブは、録音することで試聴音源となり得るか」というテーマも設けており、参加者に持ち込んでいただいたポータブルレコーダー(ほとんどの方がスマホでしたが、本格的なPCMレコーダーの方も2割ほどいらっしゃいました)によるライブの録音も可としました。

イベントは機材トラブルもなく無事に終わることができました。気を遣ったのはボーカルの7人がモニター無し状態で大型スピーカーを背にして歌わなければいけないというところで、はじめは少々歌いづらそうでしたが、途中からは、いつものライブ環境とは違う高解像度オケ再生を楽しみながらパフォーマンスしてくれました。

さて、肝心の参加者の反応ですが、当日感想をスタッフに伝えてから帰られた方や、イベント後にツイッターで内容を拡散してくださった方など、どなたも大満足の様子で、多くの方に共通する感想としては、「音楽をていねいに聴く楽しみを発見した」という内容が多かったように思います。

もちろんクラシックやジャズの高音質ソースに比べれば、音楽自体の情報量は少なかったかもしれない。ただ自分の好きなアーティストの作り込まれた楽曲をじっくりと聴くという、昔であれば当たり前だった体験をあらためてすることによって、より深い音楽の楽しみを実感されたのではないのでしょうか？

いきなり「CDを聴いてください、いい音ですよ」というおすすめをせず、ワンクッション置いて、ライブのオケを何気なくハイエンドオーディオによるハイレゾ再生に入れ替えてみるという少々大げさな試みは大成功いたしました。

また、参加者による録音音源は、インターネット上の随所にアップロードされ、スマホで録っても案外聴けるとか、どの機材だときれいに録れたとか、どの席がよかったとか、などの話題もやり取りされ、イベントに副次的な効果を作ってくれました。



ミスチルのマスタリング前音源について説明する森安氏



購入された LUXMAN PD-171A について熱く語る伊東氏



ハイレゾ音源をバックに歌うアイドルネッサンスの皆さん



産業ロックのヒット曲をマニアックに紹介する岩井氏

● 自社イベント・プログラム

ゲストプログラムの合間には、自社スタッフによる下記の試聴会も実施いたしました。

今回はすべてのイベントで(基本的には)クラシックとジャズを再生しないことを暗黙のルールとしました。ハイレゾは J-POP しばり、レコードは 80 年代ヒットしばり、とかなり乱暴な絞り込みをしてのプログラムとしましたが、音質には気を配り、事前にじっくりと選曲した音源であったこともあって、どのお客様も楽しそうに参加されていました。

イベント内容	詳細
J-POP とハイファイシステムでいい音を聴こう！	話題のハイレゾ音源を中心に、ベーシックなオーディオセットで J-POP のいい音をご紹介します。
真空管アンプとレコードで楽しむ 80's ヒット	いま再び注目を集めるアナログレコードを、艶やかで暖かみのある真空管アンプで再生します。

まとめ

上記のように、これまでとは違う何か試してみよう、ということでさまざまなプログラムにチャレンジした今回の OTOTEN ですが、やはり成果と課題がいくつか見えました。

まず、高音質音源の再生に慣れ親しんでいる自分たちにとって、やはり音質を最大に優先していない選曲というのは少々ストレスを感じるものでした。参加されたお客様も「あれ？いつもかけないような曲だな」という顔をされていたのも事実です。それでも、自身の青春時代にヒットした曲がかかり始めれば、そのような細かいことは置いておいても、懐かしさと、それを倍加させるオーディオの魅力によって、身を乗り出すように楽しく試聴されている様子が見られました。

オーディオの楽しみを思い出した方、本格的なオーディオを初めて体験した方など、多くの方が、自分の好きな曲、あるいは聴きなじみのある曲がいい音で鳴っているのを聴き、何かの「気づき」を感じていただけたのではないかと思います。

このような方々が即日ユーザーになってくれるわけではないですし、今回のようなイベントは継続しなければ、目に見える効果にはつながらないかもしれません。ただ、少し振れ幅の大きなことを何かやってみることで変化の片鱗が見えた、そんなイベントにはなりました。

次回以降、また別の音楽ジャンルでチャレンジしてみたいと思える結果には至ったのではないかと思います。

最後になりますが、会期中は OTOTEN 事務局をはじめ、さまざまな方にご尽力いただき、一部ご迷惑もおかけしながらラックスマンの OTOTEN ブースは無事運営することができました。

実はラックスマンは、日本オーディオ協会主催による展示会へのブース出展は 16 年ぶりでした。それゆえに、自分たちの思いと、今回、日本オーディオ協会が掲げたコンセプトが合致し、うまく同調できたことをうれしく思います。来期はこのコンセプトがより強力になり、参加出展社の皆さまともども、新しい顧客獲得に向かってさらに大きく成果をあげていけるよう、力を注いでまいります。

筆者プロフィール

小嶋 康 (こじま やすし)
ラックスマン株式会社 商品企画部
日本オーディオ協会理事